

2013年10月31日

講師：株式会社中村藤吉本店代表取締役 中村藤吉さま

すいません、初めまして。ただ今ご紹介に預かりました中村でございます。こういう大勢の皆さんの前でお話しするのは本当に苦手で大変緊張しております。あんまりこういう機会もないもんですから、今日は私本当に5人以下やったら割にペラペラとしゃべるんですが、5人を超えますといたって緊張いたしますので、今日はたぶん言うてる内容の中ですわ、誤字脱字とか言い回しがおかしいとか、不適切だとか、そういう類のことが多々あるかと思えますけれどもそれはご容赦ください。

それでは一番最初にお手元に配りました重要文化的景観というようなことで、宇治市の方から、宇治市と文化庁の方でわれわれの家の家屋調査に入っていて、その資料をもとにわれわれの歴史、今まで経過してきたことですね。どんなことをやってきたかというようなことをこれであらためて私自身も認識もさせられましたし、詳しく書いてありますので、われわれの歴史というところからお話を始めたいと思います。

概略なんですけれども、そのまず7ページですか。お手元の資料の7ページのほうにわれわれの大体の概略が書いております。私どもの家というか、店に関しましては中村藤吉という初代のお父さん、お母さんがおまして、そのほうは伏見の下板橋の板金屋久兵衛という方の息子で、板金屋というのはいわゆる屋根屋ですね。その人の息子さんで小中村六兵衛という人が小さい時に茅葺き職人の小中村六衛門というところの養子に行きまして、それで自ら茅葺き職人になりました。文政2年に宇治の槇島の農家の娘を、山本文右衛門という方の娘でトサという方と結婚をしまして、長女ツルという人をはじめ二男三女ですね、5人の子供をもうけて、そのうちの1人、今でいう次男、4番目の男で次男なんですわ、それが中村藤吉という、小中村藤吉ですね、という方になりまして、その人が安政元年に独立をして今の商売を始めた。その商売を始めるにあたってなんでその茅葺きの職人が宇治と縁を持って、またお茶の商売をするようになったのかなというようなことをこの中から調べていきますと、おそらく両親ですね、小中村六兵衛という方が茅葺き職人になって、そんなことでお茶屋さん、茶師ですね、茶師と縁があったのか、それとも自分の母親の農家ですね。それが茶農家やったかわかりませんが、小さい時に御物茶師といわれる宮家とか、将軍家へ献上できるような茶師の星野宗以という方のもとに修行に入りまして、それが大体10歳ぐらいだったみたいです。10歳ぐらいに丁稚に入って、それで20歳の時にはもう手代となって、それで独立をしていくわけですね。それがちょうど幕末の真っ最中。もう本当に動乱期ですね。尊皇攘夷が叫ばれて長い鎖国の中の時代が終わりを告げようとしている中で、新興勢力として安政の元年に中村藤吉という名前で商売を今の地で始めたわけです。その中で始めるにあたって最初に約2年程度ですね、丸屋藤吉という証文でお金を借りたとかという証文が出てまいりまして、最初2年間は丸屋藤吉というような名前を名乗って、その後その丸屋藤吉から現在の屋号の「まると」という屋号を

つけて名前も中村藤吉というふうに改めて商売を今の現在の地で始めたというようなところですね。

その中で次には子供を四男三女、藤吉さんは四男三女の子供をもうけて、ずっと続いていくわけですが、そんな中でちょっと小さいかも分かりませんが、年表がその中についております。年表と横に敷地の拡大図というような内容の資料が入ってるかと思えます。創業いたしましたのがちょうどこの図でいう、ちょうどこのあたりですね。このあたりで創業を安政の元年に始めまして、そこでまず商売を始めて、わずか15年、20年近くですね。20年ぐらいの間に横の土地を買ったり、後ろの土地を買ったりして、どんどんどんどん商売を広げていくわけですね。それがちょうど安政の元年から明治の初期。幕末の動乱期で本当にもうドサクサに紛れて、商才もあり、自分もがんばってどんどんと商売を拡大していったという一番の拡大、創業から拡大期ですね。ちょうどここですね。ここの今現れたところで座敷と呼ばれる、この小さい写真ですが、この格子の付いたところ、ここに元家（もといえ）という家があって、ここから敷地の拡大を始めていったわけですね。隣を買ってどんどんと広げていって、こういう形の焙炉場やとか、製造場等々含んで、ここは製造の拠点としてどんどんと広げていくわけですね。それが大体明治の20年代後半まで続いていくわけです。このこれ以外にもこの後ろに茶畑やとか、そのほかに藪やとか、畑とかいうものをどんどんと広げていって、それで大正期には元家といわれるこの部分を取り払ってですね、大正3年にはここに今と同じ形の建物を建ててですね、割と凝りに凝って建てた建物ですから、いまだにしっかりしております。そんなところでここに新しく座敷を建てて、ここにあった家を一番奥に持って行って、私の小さい時には元家と呼ばれる家をここにまだ現存しておりました。そんなところがあって大正3年、ここに書いてますように、挽茶の、抹茶の機械ですね、の電動化に成功したりというようなことで、どんどんと業容を拡大していって進むわけです。

進んでいくんですけども、次には日中戦争から世界大戦というようなところへなっていくまして、業容が停滞していきます。停滞していつに昭和の時代に入りますと世界大戦が始まって、その終戦を迎えて次には縮小というか、どんどんと業容が小さくなって悪くなってきます。その時に畑を売ったり、藪を売ったりというようなことでしのいできて、どんどんと小さくなっていく。

次には昭和高度成長期に入って新興勢力が次にわれわれと違う新興勢力がどんどん出てくる中ですね、お茶屋が小売店でなければお茶を売れないというような錯覚を持って、それまでの旧のお茶屋というのは流通の変化ですね、スーパーやとか、デパートなんかでの流通で、棚に入れてセルフで販売のお茶をできるということは考えなかったわけですね。そんなものがどんどんどんどん昭和30年代ぐらいからスーパーの拡大とともに一般のお茶の小売店というやつが減っていきます。そこで旧来のお茶屋というのはここのところで既にもう流通経路は確立をしてるわけです。生産地の問屋から消費地の問屋へ。それから消費地の小売店へというような流通をしっかりと持っていますから、そんなスーパーに出すなん

てことは、うちはじいさんから言わせるとあの時代ですと棚に置いてお茶が売れるかというようなことで馬鹿にしてたんです。そこへ新興勢力の人たちは販売の経路がないわけですから、飛びついていったと。飛びついていった結果そこはもう大成功を収めていくんですね。それでどンドンどンドン高度成長期とともに、お茶というのは嗜好品でなくなってギフトとしての需要が始まって、われわれの商売としてはどンドン縮小になっていきます。縮小になっていって次に高度成長期から日本の経済はバブル期に入って行って、バブル期の時代も百貨店と取引をしていけば、どンドンと 2 ケタの伸びを示して行く。そういうところがわれわれのところは極々限られたところだったんで、じっと指をくわえて見ている。どンドンともう縮小せざるを得ないというようなところに入って、バブル期のころにはもうお茶屋をやめてここを全部マンションにして等価交換で上に物を建てて、下で商売せんかというようなお話がずいぶんありました。おそらく私が社長してたら、当代の当主だったらその波に乗ったのかなというふうに思います。うちの父親は大変慎重だったのでそういうところに乗らずに我慢をしながらやっていったということで何とか今のところ守れた。守ってもなかなかその維持管理というのができませんので、隣にマンションを建てたり、それから私の弟が独立する際には屋敷の一部を改装して歯医者にしたりというようなことでの土地活用やとか、それからこの後ろに今現在なくなってますけれども、こういう昔の茶選り場とか、製造場とか、そんなものを細かく割ってアパートにしたりというようなことでしのいできたというようなところですね。そんな中で私自身は今の建物を改修してこの奥ですね。ここにカフェを作って今流行っているというふうに言われておりますけれども、これから先にはどうなるかわかりませんが、大体以上がわれわれの歴史ですね、敷地の拡大とともにはっきりとしたその建物の利用、それからいらんものを省いていくというようなことがきちんとわかる年表になってます。

後はこの中にはありませんがその年表の中でですね、われわれの家系図を見つけまして、先ほど話をしておりました、まず小中村ですね。まず、その板金屋久兵衛という方が小中村六兵衛さんのお父さん。養父で小中村六兵衛さん。実子ですね、ここは実子ですから小中村六兵衛という方が養父の跡を継いだ。それに中村トサという人が嫁に来て、これが久世郡の槇島村の農家の娘ということで寛政の 10 年に生まれて明治 22 年に死んでいます。これがこの方が中村藤吉さんのお母さんですね。この人がこの夫婦が生んだ子供がこれですね。ここにいます、これだけの三男二女ですか。ですね。この頃は一番上だけを長女というふうについて、2 番目の女の子は二女、長男ですけれども、小中村久七という方、三男と書いてあります。次男ですけれども中村藤吉さんは四男と書いてます。それで五男がいて 2 人の女の子と 3 人の男の子を産んで、それでこの人がムメという京都府の久世郡のお生まれの嫁をもらって次に続くということですね。

これを調べて面白いなと思ったのはこの関係というのは中村藤吉さんとそれから中村六兵衛さんですね。この 2 人は血がつながっているわけですね。実子でこの方の実子が中村藤吉さん。実子やけれども長男の家には小中村六兵衛さん、お父さんは行かないわけです

ね。この人は京都の市内で茅葺き職人として小中村姓を継いで京都の市内へ出て行く。この人は宇治へ引っ越してきて、自分の親を引き取ってお茶屋を始めよるわけですね。この間は実子ということでおそらくトラブルは何もなかったかと思う。中村藤吉さんの後ですね、この方は次にまたたくさん子供を産みましてですね。7人子供をもうけているんですね。7人の子供をもうけて長男は芳太郎という名前、で、ムメさんという嫁をもらう。文次郎はよそへ行く。女のミツさんというのもよそへ行く。増三郎さんもジウさんもよそへ行く。末吉というのがおりますけれども、これが一番末弟ですね。芳太郎さんとは大体年の差が17、18歳あるんです。この末吉さんが松江に行くわけですね。小さいころに。松江に行ってこのイワさんという方と結婚をしている。中村芳太郎さんという方の子供はないわけです。ここに子供はないのでこの末吉さんに家に戻ってこいと言うんですが、この中村イワさんというのが、その当時島根県の松江市で松江小町と言われたぐらい別嬪さんやったそうです。この人が宇治みたいな行きの嫌やと。行くならあなた1人で行きなさいと言われて、中村末吉さんは奥さんに引っ張られて松江にもう骨を埋める覚悟をしたわけです。このままでは家が途絶えるので、次に来たのはこのイワさんの弟ですね。弟が次の代を継ぐべく、ここに来るわけですね。中村卯吉というんですけれども。この卯吉さんというのは非常に頭のいい方で、宇治の町長も務められた方です。それに松江の方から中村ハナさんという松平藩の家老の娘やったかな、かなんかで逼塞はされてたそうですけれども、私のひいばあさんになるんですが、非常に別嬪さんで頭のいいしっかり者のおばあさんが来ます。ここで血縁というのはないわけですね。おそらく、ここの芳太郎さんと卯吉さんというのは非常に気を使いながら、生活をして商売をされたんじゃないかなあというふうに思います。

次にこの中村卯吉さんにも悲しいかな子供ができたんですが死んでしまって、次の世代がないというところで次に子供をまたもらってこんといかん。昔はよくあったそうですけど、養子をもってこんといかんというようなことで、次に自分の末弟ですね、末吉さんの一番末の弟、ここで芳太郎と書いてあるのが長男。2番目の女、きぬというのが長女で、次に中村留子という名前の2番目の娘がいて、長男で芳男、三男で東次という、東を次ぐというふうに、あんたもう向こうを継ぎなさいということが大体規定路線で決まっていたのかなということを思います。この人をまた養子に迎えるわけですね。この養子に迎えて次の世代が始まるわけですね。ですから、ここでは次にまた血のつながりがなくなるわけです。親子関係とはいうものの。この人は養子にもらわれてきた。だから1代飛んでの甥っ子ですね。甥っ子をもってきた。こちら側はいとこ同士の結婚ですから、姪っ子がまた家の中へ入ってくるわけです。

この人たちは直接家とは関係のない血筋なので、ここが中村家とは血縁があって直系にはなりませんけれども、血のつながりはあるわけですね。ですから、ここもまた確執というか、そういうものがずいぶんあったらしいです。私どもの直接のおばあさんですから、よくよく話を聞いてみますけれども、ひいおばあさんとの仲はずいぶん悪かったそうです。嫁

に来た当時には6時に起きてご飯の用意をしようかなと思ったら5時に起きたはる。5時に起きたら次4時に起きたはる。4時に起きたらもうその時には起きたはる。もう4時であきらめたという話です。これ以上は早う起きられへん。一体このおばあさんはいつ寝たはんねやろ。それぐらいしっかりして、しっかりもしてられたし、きつかったと思います。明治の生まれの人ですから、本当に寝る間も惜しんで働いてというようなことだったと思います。この人にはやはり中村の血筋やという思いもあるし、そんなところでの確執があったんじゃないかなと思われま。それはもうわれわれの家だけじゃなくて、おそらく何代か連なってきた家の中では大なり小なりいろんなものがあつたんじゃないかなというふうに私は思います。

次にこの中村東次、孝子ですね。私の祖父、祖母にできたのが次に出てきます中村清というのと、中村幸子ですね。この清というのが長男で生まれたんですが、わずか1歳で亡くなっています。これ、亡くなったというのも松江で亡くなつてますのでいろいろ聞かされることはありました。中村幸子というのは私の母ですけれども、一人娘ということで私の父、中村復也というのを向日町のほうから養子に迎えるわけですね。また、ここでも夫婦関係としては生きぬ仲になるわけですね。母と血のつながりがあるけれども、父は養子から直接の関係がない。男同士での直系の関係というのがないわけです。直系の関係があつたのは初代と2代目ですね。次、ここもない。この2人に私を含めて兄弟があと2人、下2人おりますのでできてくるわけです。ここで私の幼名ですけれども私のつい最近までの名前なんですが、中村藤司。それから雅彦、清孝、この3人が生まれるわけですね。父とは直接血のつながりはもちろんありますし、あれなんですが、やはり養子で来たということで私との関係は非常によろしくなかつたです。そんなこともあつて外へ出たわけですが、また後でお話をしますけれど。私がここに3代ぶりにでけた男ということでここに私がいるわけです。あと私の息子のところになって次に省悟、真悟という子供ができました。ここで初代みたいに初めて男同士で親子の関係ができるわけですね。直接の血のつながりができてくるわけですね。それでまあ、次男がいます。この下には私孫がおりますんですけれども、これは女の子なんで次の世代はどうなるか。まだ、息子は33歳ですからわかりません。1人だけ孫がいてるというような家系図になってます。

こういう家系図を見てくる中で人間関係をどう保ってきたか。それから商売の中をどうやってきたかというのは、この中で特にこの卯吉さんですね。ここの松江から来た人でこの人たちはやっぱり地縁血縁というか、自分の信頼のおける人間をいかに側に置くかということで松江からたくさん人間を引っ張ってくるわけです。一番の番頭といわれる人は松江の平田という地域から連れてきたのを番頭にここですえるわけですね。平田佐吉というのが番頭ですえるんです。その人に自分たちの次の世代を担うこの人のコントロールをさせようというようなことをしたわけですが、あまり頭が、家の中ではその平田佐吉さんというのはいろんなことを言われてきましたけれども、冷静に私がこういうその中で見ていると平田佐吉さんというのは非常に頭が良くて力があつて勉強はようでけたと。そ

したらこれ直系やないけれども血のつながりはあるわけですね。この人が入ってきて自分の頭を抑えようとする番頭はんというのは非常に気に食わん。おそらくそういうことで自分も、自分よりも年も上で頭もよくてしっかりもんやと。その人からしたらやっぱり自分を連れてきてくれたこの夫婦に対する恩義があるから、なんとかせないかんということで、叱咤激励をしたり、いかんことはいかんと言うというようなところがあったんだと思うんです。でも、この方は自分は直系やという意識もあるし、あのおばあさんも私は中村の家のもんやないかと、なんで他人のあんたに文句言われんならんねんというようなところがあったんじゃないかなあと。想像ですけれども思います。次にやるのはその番頭はんの排除ですね。ほんまやったら番頭はん任せて自分はゆっくりしたらええのになと思うんですけれども、なかなかそういうわけにいかなくて、次にその番頭さんを外に出して、その方はまあずいぶん成功されてもうお亡くなりになってますんであれですけども、成功されて宇治信用金庫の創立から、もうなくなりました南京都信用金庫の初代の理事長で南京都信用金庫をつくられたというぐらい、やっぱり頭が良くしっかりしてられました。そんなところでこういうところでの葛藤があって。それも何とか乗り越えた。

次にここでの葛藤がまたあるわけですね。じいさんとおやじですね。この葛藤というのはよそから来た養子さんとそれからそのじいさん。また、このじいさんが遊び好きで、遊び好きでというもぼくは仕方がなかったと思います。この人が実際に相続をしたのは23か24ぐらいですね。おそらく今のお金に直して20億とかいうような相続をこの人が24ぐらいにしてるわけですね。24や25で背が高くて男前やったですから、そら商売熱心になりませんわ。誰が考えても。それからどんどんどん田畑を売っていくわけですね。売って行ってその売っていった結果の始末はうちの父がせんらんわけですから、恨みがあるというようなところで非常に仲が悪かった。そんな関係でもまあまあどうにかこうにかやはり祖父も今の家屋敷だけは残さんらんという意識もあってそれだけはなんとか残します、というようなところで、この世代間での確執というか、時代が終わっていくわけですね。

次に私と父なんですけれども、私と父の方はですね、ぼくはじいさん、ばあさんと育てられたというようなこともあって関係は非常によろしくなくて、ちょうどローソンをする前ですね。そういうことで家の中ぐちゃぐちゃになってますし。詳しくはさっき経歴では言いませんでしたけれども、私非常に勉強が好きですね。小学校6年間、中学校は3年間、ここまでは教育大の附属へ行って、そこそこにいいポジションにいたわけですよ。そこから高校へ上がりません。次に平安高校に行って1学期待たずにですね、2カ月ぐらいで学校やめて、あとプータローしてたんですよ。プータローしておやじが気に食わんから、お前学校行けとかどうのこうの言いますけれども、そんなんもう高校性、16ぐらいのことですから言うこと聞かなくてブラブラしてたんですが、高校1年でやめて次に2月ごろになって、ふと考えたらこのままいくとおれ中卒やなど。これはなんぼなんでもまずいなということでもう一度学校のほうに行き直しまして、奈良の帝塚山高校

へ入学をし直しまして、なんとかそこを卒業して京都産業大学に入学をして、次におやじと一緒に仕事をするのが嫌ですから、どこかこれ就職先を見つけないかんとということで、ツテをたどってここは縁故入社ですけれども、大阪の鉄鋼会社に入社をして。で、入社が決まって今みたいなこんな厳しい時代じゃないですから、大学の単位を落として留年してしまいました。そしたら、今やったら絶対にね、会社に勤めるというようなことは無理やと思います。その当時はゆるかったですから何単位やと。1単位ですという話を先方の社長のところにしに行ったら、内緒で来いと。卒業証書なくてもええから内緒で来いとというようなことで雇っていただいて約2年間ほどですかね。勤めをして。

勤めをする間も非常に生意気なサラリーマンでしたし、世の中のルールも何もわかりませんし、家がどんな商売をしていた関係もあって、その当時土曜日が半ドンで土曜日昼から遊びに行くとなったら、家の車を借りて会社の中で駐車場があって、いやここは部長の場所、いやここは課長の場所なんていうことは全く知りませんので、好きに止めて。そしたら新しい車に乗っていくと誰がこんな乗ってきよったんやというようなことで、ずいぶん社内でたたかれてすぐに東京へ転勤になりまして。東京で1人住まいを初めてやりました。そうこうしているうちに父から連絡がありまして、当時、お前今度宇治でローソンをやるから帰ってこいという話に、昭和51年ですか、なりまして。昭和51年にローソンをやる、分かった。そしたらおやじ、別会社をつくれと。その時24ですかね。24歳でしたね。別会社をつくれということで別会社をつくらせて、おれのやることに一切口を出すなど。それやったら家に戻るというようなことで非常に生意気やったですし、よくおやじはうんと言ったなと思いますけれども、別会社をつくらせてローソンを始めて。ローソンは約2年、1年半かな、2年弱ぐらいですね。今のローソンの形態ではなくて、まだダイエーローソンと呼ばれた時代で、関西圏というか、全国で27店舗か28店舗しかない時代ですから、輸入物のデリカテッセン、それから輸入のお菓子というものをそろえてやったような店ですから、宇治みたいな田舎では一切はやりません。で、2年弱ぐらいでもうどうにもこうにもならんような状態になって、本業というか、今のお茶の仕事に戻らざるを得ないというようなことになりまして、それでお茶屋に戻りました。

さあお茶屋に戻ったのはいいですけれども、おやじと仲悪いですから、おやじのやることなすこと気に食わんわけですね。けんかばかりしてました。ある日つかみ合いのけんかをしてね、おやじをバーンと、30半ばぐらいかな、過ぎぐらいだったと思いますけれども、おやじの胸ぐらをつかんでガーッと引き倒したらおやじが簡単にこけてしましましてね。それから、ああこれはもうおやじとけんかしたらいかんなど。自分のおやじと言ったら、ものすごくその体力があっただけかなわへん存在やったですけど、こんなにもろくこけてしまうのかというのを初めてわかって、それからもうけんかはなくなったですね。ただ、商売の中というのか、商売のやり方については私はおやじとは全くやり方が違いますし、負けん気強いですし、向こう見ずですし、おやじみたいな慎重に考えて優しくゆっくりということが性に合わんたちでしたから、商売は本当にぶつかり合いばかりだったんです。

ぶつかり合いをしながら、どうしていこうかなど。まあ親はどんどんと年いっていきま  
し、自分の父のことを褒めてあれですけれども、私はちょうど 39 歳の時に「藤司」と呼ば  
れて「なんやおやじ」。すごんでいくわけですよ。そしたら、まだおやじの名前やったです  
けれども、39 歳の時にハンコとそれから実印と銀行印、その三つを自分の前にポンと出し  
てくれて。「明日から銀行をやれ」ということで、39 の年に銀行の関係を預かって、40 歳  
になった時に 4 月に「もうお前今日から社長せえ」ということで 40 歳でポンと社長を渡し  
ました。その時には実感もなかったですし、実感というかおやじのことを何とも思わな  
かったですし、社長になんのかみたいなお話やと。40 歳で社長を継いでそれから家業のほうは  
どんどんとそれから整理整頓して、ぼくのやりたい方向にやりたいように向かっていくわ  
けです。晩年おやじがぼくに譲った経緯を自分で酒を飲んでる時にちょろっとしゃべった  
のは、40 で商売を継いでやっていったらまだ取り返しがつくと。これ 60 過ぎて、ぼくもう  
60 過ぎましたけれども、60 過ぎて社長になったら失敗したら取り返しがつかへんし、やり  
直しがきかんと。だから柔軟な頭の中であるうちに譲らんなんらんとすることは思ってたん  
だということで、40 歳で譲った理由はそんなことやというようなことを酒飲みながらちょ  
ろっとしゃべって。その時に、ああそうか、自分のおやじものすごい嫌いやったし、いろ  
んなことあったけれども、やっぱり先のことを考えながらおやじはおやじなりにやっとな  
んてんといっ、本当に自分の父親ながら尊敬ができた時やったんですね。

40 で継いで本当に紆余曲折をしながら、いろんなことを考えてやりましたけれども、松岡  
先生がお書きいただいたようなご本の中でのそんな格好ええことばかりじゃなかったで  
すし、本当に泥臭いというか、生臭いというか、どういうんですか、本当にもうつかみ合  
いをしながら、それから今の事業を成立させていくまでの中では、本当に涙を流しながら  
嫁と、ほとんど嫁の手柄だと思えますけれども、嫁の足をパーンと蹴りながら、いろん  
なことをしながら、今のカフェというような、町屋のスイーツのさきがけというふうに言わ  
れますけれども、そんなところに入って行って今の現状がある。そんな中でぼく自身が商売  
をやってきた中で成功ということにはまだまだ及びませんが、なんでここまででき  
たのかなということ自分をの中で考えると、やっぱりぼく自身は友人の関係というか、周  
りにいた人たちが、ここはものすごく恵まれたなあというふうに感じます。いい友だちが  
いて、適切なアドバイスをしてくれて、その人たちがぼくを支えてくれたんだなど。その  
支える要因になったのは一体何かなど。

こんなことで家系図やらいろんなことを調べていって感じるのは、あれやなあ、やっぱり  
ご先祖様というのはやっぱりおやじも含めて悪いことしはらへんかってんなあ、怨みを買  
うようなことをしてきはらへんかったから、ぼくは今その恩恵を被ってるんやなど。おそ  
らく地域社会でがめつい、強引なことをやってたら、おそらく皆がそっぽを向いていっ  
ただろうし。そんな中で人間関係、その友人も含めての人間関係というのはぼく自身が成立  
はさせていけなかったと思いますし、そういう意味でご先祖というか、父も含めての先祖  
というのは地域社会に対して恨みつらみを抱かれるようなことなしに、ちゃんとした生き

方をしてきたんだろうなあというふうに、こういうものを作っててつくづく思いました。そんなところがまとめといいますか、ちょっと早いですけれども大体われわれの家系図からした今までのわれわれの年表といいますか、生きてきた道というかというようなところ  
です。ちょっと早いですけれども、あとは質疑応答に移らせていただけたらなあという  
ふうに思います。